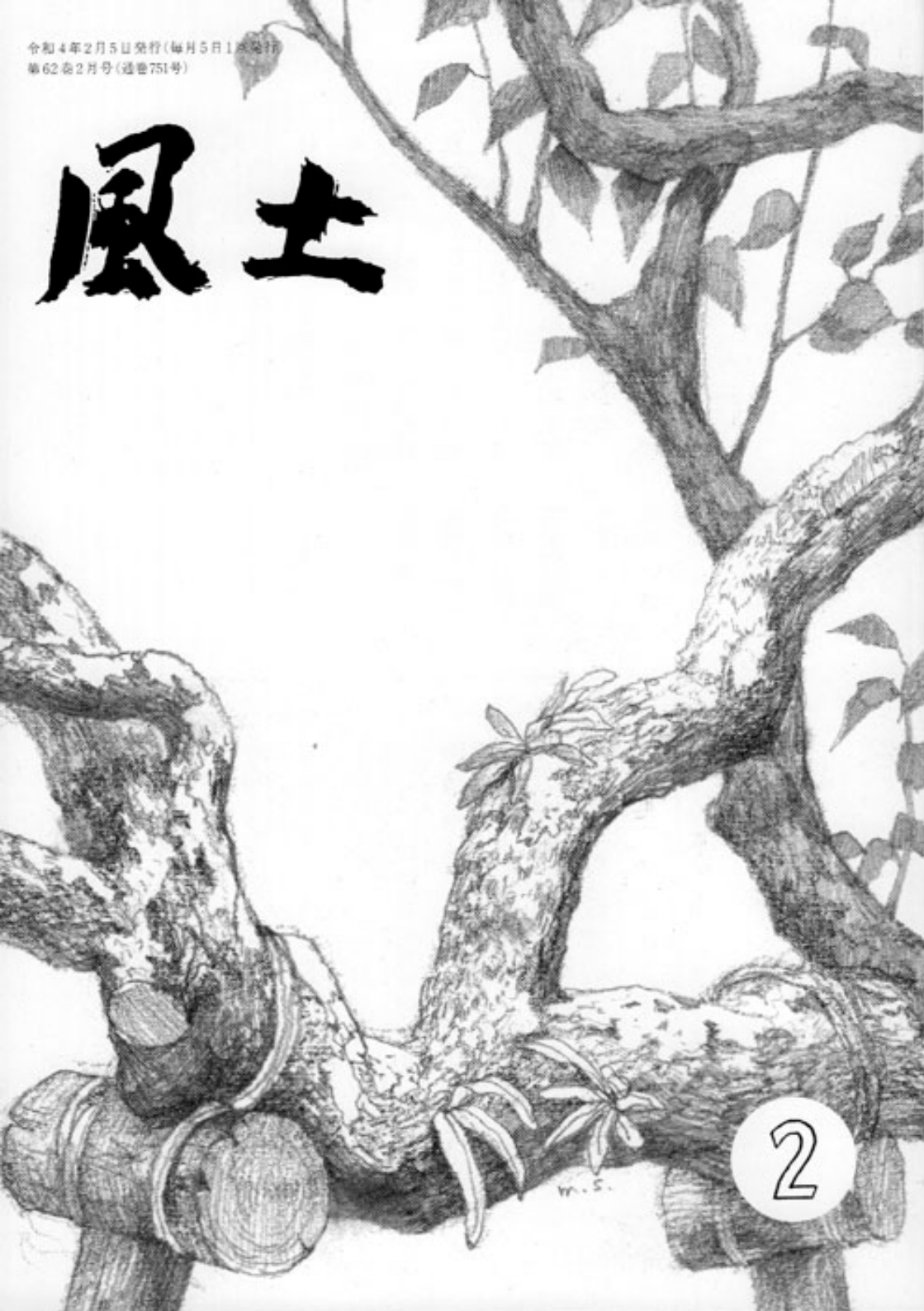


令和4年2月5日発行(毎月5日1回発行)
第62巻2月号(通巻751号)

風土



2

石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

柚子浮いて鹿鳴風呂に木の香立つ

(句集『竹取』より昭和三十三年作)
この句には「馬酔木鹿鳴賞受賞」の前書があります。この頃の桂郎師は「鶴」と共に「馬酔木」の同人でもありました。「馬酔木」での第一回の文章による賞が「鹿鳴賞」で、桂郎師が見事受賞したのです。「鹿鳴風呂」が解わにくいですが、壊れた風呂桶を副賞として新品に替えてもらったのです。その記念に「鹿鳴風呂」と名付けました。久しぶりの柚子風呂は、木の香と共に気分がよかったことでしょう。

霜降やねむりぐすりを酒で嚙み

(句集『竹取』より昭和三十四年作)
一読、はっとさせられる句です。手塚美佐編の『石川桂郎集』（俳人協会刊）の註によれば、肺の手術後の傷の痛みに耐えかねて、退院後も睡眠薬を常用するようになったとあります。しかしそれを嚙み砕いて、酒で流し込むというところに、単なる酒好きを通り越して、桂郎師の「破滅型」の一端を垣間見ます。作家仲間であった太宰治の在りし日と重なるような世界です。

神蔵器俳句鑑賞

南 うみを

いろはにほへと酒の器の茶が咲いて

(句集『氷輪』より平成二十年作)
この句は桂郎師の「遠蛙酒の器の水を呑む」(昭和三十年作)と「一輪挿け茶の花をほしと思ふ」(昭和四十九年作)を踏まえたものです。「遠蛙」は、桂郎師が肺を病んで酒を断ち、愛用の黄瀬戸のぐい呑みで水を呑むという意の句です。また「一輪挿」は、桂郎師に食道癌が見つかり、聖路加病院に入院した時の句です。現実には、酒の器に茶の木を挿すことはできませんが、句を通して桂郎師と語らう器師には酒の器の茶の花が見えるのです。

烏瓜引き来しは誰雲の中

(句集『氷輪』より平成二十年作)
これも桂郎師の「明史来ぬ瓢と掲げて烏瓜」と器師自身の「烏瓜あれば明史の来てゐたり」から引き出された句になっています。いずれも「風土」の鍛錬会に烏瓜を掲げて来た浜明史氏への挨拶の句で、「風土」では「息瓜」と言えば明史、「明史と言えば烏瓜」でした。この句の「誰」も当然、天上の明史氏です。

山姥 南うみを

悼 鈴木石花様

鶏鳴のひびきわたれる寒露かな

若狭・名田庄 三句

葛もみぢ這ひ廻りをる捨て畑

鬼柚子を播つて若狭のかぶら漬

陰陽師潜みし里ぞ笹子鳴く

立冬の小石を弾く鍬の音

へろへろと暦の揺るる神の州守

小蕪を引くと云ふより摘み上げ

風呂吹の湯気を二つに四つに酌む

岬畑へ花石露伝ひ波つたひ

鳩かづく互ひの水輪くづしては

綿虫の高さに薪を積み上げて

朴落葉踏むなよ山姥が来るぞ



竹間集

同人作品



俱利伽羅峠

豎山道助

がうがうと冬木の中の海の音
八十年前の師走の日に似たり
風に哭く伊勢屋の土蔵一葉忌
新酒注ぐ陶淵明の墓にか
イエローズ・マターのコール十二月
冬日和空を見てゐる猿の子
維盛の俱利伽羅峠風花す

狐

火

山田暢子

心療内科あとは歯科医へ十二月
背景は青空枯葉躍らせて
形見分けより始まりぬ年用意
牡丹鍋食はず嫌ひのまま通す
書き終へて暖房を切る午前二時
酔ふことの楽しさ知らずクリスマス
わが晩年まだ狐火を見てをらず

木の葉

岩木

茂

印結ぶ佛の指や冬木の芽
仏像とはなれぬ部材や地虫鳴く
冬霧やたましひ宿る木端仏
大綿を攫ひてゆきし塔の風
掌ほどなる地蔵千体冬あたたか
新蕎麦を啜り惜しめる命かな
火の落ちし炉辺に木の葉がひとつあり

松尾寺辺り逍遙

浜 福恵

清浄洗心・抜苦与楽や霜晴るる
銀杏散る巡礼古道近江へと
冬晴るる眼差しやさし神馬かな
小鳥来る声して句碑を読みをれば
鶴子・左近衛の句碑の前
冬芽耀く辛夷大樹となりみたり
馬耳山麓を北へ分け入り猿茸
先行く人の遠くとほしや枯野道
夫十五年忌

一葉忌

門伝史会

霜月や樹の瘤力みなぎりて
武蔵野の夕日に歩む黄落期
蓑虫や風の意のまま糸長し
冬桜富士炭展望の美術館
冬日和鳩の中なる乳母車
直ぐに出ぬ言葉もどかし一葉忌
棒読みのごと日の過ぎて一葉忌

落葉道

小林 輝子

子の採り来滑子の凍みを日に溶かす
見えぬもの見んと背を伸す十二月
自動車のライトに映る大狸
裏山の諸草を薙ぎ雪を待つ
豆腐買ふみぞれが雪に変はるとき
一句欲し杖にまさぐる落葉道
まづ夫への供花にはじまる年用意

冬紅葉

田中佐知子

聖徒らに十一月の芝ぬくし
悟りの窓迷ひの窓や冬紅葉
警策の音の一打や白障子
磴百の空より紅葉時雨かな
冬紅葉ぜんざいの餅よく伸びて
病院の中の保育所笹子鳴く
結納の使者となり坐す白障子

桐の実の音

中村洋子

一人来てみな寄つて来る冬日向
桐の実の音となる風一葉忌
夕時雨傘の屋号で呼ばれけり
鷹柱一羽離れて仕舞ひけり
波郷忌を以て残菊となりにけり
神鹿も飛火野に群れ神の留守
酉の市手相見に寄る戻り客

吹き寄せ

橋添やよひ

吹寄せの干菓子を囲む一葉忌
神無月おのが余命を知らず生き
遙かなる母への思ひ布団干す
雨の宇陀冬耕点となり消ゆる
おでん酒湯気に解け出す本音かな
浄土寺の弥陀の坐像や白式部
牡蠣小屋や牡蠣打つ音を積み重ね

畑小春

浅田 光代

金堂に微塵ののぼる今朝の冬
冬天へ弘法市の鏡吊る
枯山に槌音ひびく宮普請
産土神の縄縷ふ日なり冬椿
冬蝶の影ぎくしやくと日を渡る
鴨一羽動きてどれもついて来ず
スコップも箒も逆さ畑小存

大熊手

柿沼 盟子

公園は木の実の国となりてをり
天高く正午の汽笛谷戸深く
菓子パンのどれもまるくて冬日和
おかめ笑む熊手まぶしく灯されて
高々と人波にのる大熊手
冷やかや疑問の付箋数多立ち
ざる菊てふ黄菊色菊医科の門

山河集

同人作品



南うみを選

波郷忌の櫓は雲にとどきたり
仏堂の屋根をすべりて冬落暉
一つ火の膝をたたみつ三拝す
一つ火の闇に「後灯」の淡く浮く
一つ火の果て足下に夜気つふる

森田 節子

アイロンの微かな余熱山眠る
農事メモ書き尽くしてや北塞ぐ
おでん吹く児に相好を崩すかな
葉牡丹の白きを好み誕生日
鯛の網開かれて散るひかり

石井美智子

弘法市加茂の里より初すぐき
歳の市客も売り子も膝ついて
大方は箸の穴あり大根炊く

渡辺 やや

出羽包丁やつと出番や新巻来
平積みの本を手に取る時雨かな

小原美美子

晴明の家系ながなが雪蛸
相席は若狭ことばよ走り蕎麦
新蕎麦を待つ間よろしき谿の風
山国の冬たんぼぼの文低き
寂聴逝くほとぼりのなほ玉子油

山田 健太

涙腺に老いの兆しや返り花
放たれて四肢疾走の狩の犬
きらきらと秋水こぼす猫の舌
紙飛行機紙の折り目のさはやかに
ソファアゴと夫を動かす小春かな

風土独語／南 うみを



一つ火の闇に「後灯」の淡く浮く 森田 節子

「一つ火」は、一遍上人の開いた時宗の総本山の通称「遊行寺」で行われる法会で、「御滅灯」と言われる。阿弥陀仏の念仏の中、木堂の灯が次々消され、暗闇の中で火打石により再び光明の世界が生まれる。闇から阿弥陀と釈迦の光明の世界が戻ってくることを表現したものである。「後灯」は堂の後ろで、唯一灯されている淡い明かりで、一人の僧が「後灯」に登り、この法会を見守る。ここには「闇と光明」の荘厳なドラマが描かれている。

簪を大きく揺らす菊師かな 山田 健太

この作家の表現の特徴は、デッサン（描く力）がしっかりしていることだ。今、菊師が女人の作成にかかっている。そこを簪だけに焦点を当て「大きく揺らす」と置き、菊人形が仕上がりに入ったことを読み手に伝えている。

鯛の網開かれて散るひかり 石井美智子

「鯛」は作者の住む秋田の冬の名物だ。その水揚げの様子を捉えた。「散るひかり」は、大漁の「鯛」のあり余るひかりを表現したもので、作者の郷土愛の表れである。

歳の市客も売り子も膝ついて 渡辺 やや

神社や寺などの境内での「歳の市」である。正月用の食べ物花、注連飾り、骨董に古着などありとあらゆる露店が並ぶ。中には菓座やシートに品物が置かれてあるので、売り手も客も自ずと膝をつかざるをえないのである。

赤蕪の高山の土洗ひけり 松本 胡桃

この句を読むと、俳句表現における地名の力をつくづくと感じる。野菜の朝市で有名な飛騨高山からの赤蕪である。それも土付きだ。それを洗ったと表現しているだけだが、作者の喜びが素直に伝わってくる。きつと酢漬けにするのだろう。

新蕎麦を待つ間よろしき谿の風 小原芙美子

この句の読みのポイントは「谿の風」である。これにより蕎麦屋が谿谷の近くにあることがわかる。新蕎麦が運ばれてくるまで、作者は谿からの涼やかな風に吹かれるのである。

夕暮はどの灯も恋し根深汁 岡 尚

「根深汁」は熱々の味噌汁にざく切りの根深を入れ、煮すぎぬうちに食べる。体を温め、風邪の予防にもなる。この句は回想を帯びつつ、根深汁が待つ夕暮れの家々の灯を懐かしんでいる。「どの灯も恋し」に温もりを求める作者がいる。

風土集



南うみを選

簪を大きく揺らす菊師かな 水戸 山田 健太

生まれ出て秋の蠅とはつい知らず
うららかや弘道館に蟄居の間
万屋に干し柿のあり出稼ぎ期
頼むときついつい正座花八手

町田 松本 胡桃

山茶花や潤ることなき井戸一つ
冬雲雀赤子の指の強かりき
赤蕪の高山の上洗ひけり
冬の夜や首を回せば鳴るこけし

日時計に日のあらざりし冬すみれ
霜月や舟屋出る舟戻る舟

相模原 岡 尚

味噌蔵の上に嵩なす朴落葉
初時雨漢字パズルに没頭す
夕暮はどの灯も恋し根深汁
木枯しの揉みゆく波や鳶の声

コンビ二に始まる旅や神無月 高槻 六車 佳奈

内海を弧に切り裂いて鮫の鱈
冬蜂の乾ききつたる羽音かな
講堂を巡る鈴の音今朝の冬
ちりめんを柀にて均し果大師

高槻 西田小夜子

風に吹かれてゐるやうに菊活ける
若きらに一歩も引かぬ唐辛子
冬紅葉光悦垣の内と外
肩廻し日向ぼこりの締めとする

児が泣いて槌音忙し暮早し
子規庵の庭にささめく秋のこゑ

横浜 三好 康子

白鳩や千木に並びて神迎へ
舞ひ散りて七彩映ゆる柿落葉
かな文字の和歌のごとしや菊脛
竹林の雀身を寄す夕時雨